

現代英語における綴り字と発音の不一致 —教育的視点に基づく [発音注意] 単語の分類—

鴫 崎 孝太郎

序論

英語の綴り字と発音の不一致は、これまで数多くの英語学者に指摘されてきた現代英語の特徴の一つである。その中でもポーとケイブル (Baugh and Cable) は著書 *A history of the English Language*: 5th ed. の中でこの特徴を現代英語の欠点 (liabilities) の一つとして以下のように指摘している。

A more serious criticism of English by those attempting to master it is the chaotic character of its spelling and the frequent lack of correlation between spelling and pronunciation. Writing is merely a mechanical means of recording speech. And theoretically the most adequate system of spelling is that which best combines simplicity with consistency. In alphabetical writing an ideal system would be one in which the same sound was regularly represented by the same character and a given character always represented the same sound. (14)

このように “chaotic” と形容される「綴り字と発音の不一致」という特徴が

英語学習者の悩みの種になっていることは間違いない。英単語を暗記する際、音としては覚えても綴りを覚えられなかった経験や、それとは反対に綴りを覚えても正しい発音ができなかった記憶を持つ英語学習者は決して少なくないだろう。これは日本人英語学習者のみならず、英語を母語とする者をも含む全ての英語学習者にあてはまる傾向だ。

現代英語のこの特徴を受けて、日本の英和辞典の多くは発音が難しい単語に〔発音注意〕などの標記を付けて注意を促してきた。しかし、現在日本で行われている英語発音教育の実情を考えた場合、学習者が自発的にその標記に目を向け、発音記号を理解し、適切な発音をすることができるのだろうか。答えは限りなく否定的ではないかと推測される。

本論では、英和辞典で〔発音注意〕標記が付され、日本人英語学習者にとって発音が難解とされる単語（以下、〔発音注意〕単語と略す）について、英語学と英語教育の視点から、どのような点で発音が難解なのかという基準に基づいて分類を行い、考察する。なお、辞書資料として日本の中高生にもっともよく利用されている『ジーニアス英和辞典』第4版（東京、大修館、2006年）（以下G4と略す）を使用した¹。そしてその分類を行う前に、2章において、この標記が付されている単語の語源について、由来する言語の割合を明らかにし、語源的かつ通時的な観点からの検討も行っている。その関連で英語正字法（orthography）の歴史と綴り字改革（spelling reform）にも言及している。

なお、〔発音注意〕標記が付されていない単語の中にも、日本人英語学習者には発音が難解なものがあるという主張もあるだろう。しかし、それらの単語は成田らによる『発音・綴り・語形成』（研究社出版 講座・学校英文法の基礎 第一巻 1983）で記述されている英語発音の63の「原則」²に則していることと、G4に基づいた一貫した選択基準を順守することの二点を考慮して、本論では扱わないものとする。

今回分類の対象とする英単語は、英語教育的視点からの考察を念頭に置き、G4における〔発音注意〕単語計395語のうち、Aランク（中学学習語、特に使用頻度の高い語 約1150語）・Bランク（高校学習語 約3100語）計約4250語に含まれる251語とする。また、現在日本で優勢を占めているのはアメリカ英語であることを考慮して、本論における分類は全てアメリカ英語の発音に基づいたものとする。また、発音記号を表記する際もG4におけるアメリカ式のものを用いる。

1. 先行研究

現在に至るまで、成田らの『発音・綴り・語形成』(1983)や、ウィーク (Wijk) の *Rules of Pronunciation for the English Language*. (1966) において、本論のトピックでもある綴り字と発音との不一致に関する研究が成されてきた。成田らは、50 頁以上の紙面を使い、英語教育的視点から、実に詳細に英語の綴り字と発音との関係について考察を行っている。一方、ウィークは教育的視点に基づかず、より体系的に綴り字と発音の不一致に関する考察を行っている。本論では、英語教育的視点から [発音注意] 単語の分類を行っているため、成田らが序論で述べている以下の文言からは、大きな示唆を受けた。

(3) 「原則」と「例外」

綴りと発音の関係を扱うに当たっては、「原則」と「例外」とを区別することが問題の核になる。ea の三つの発音 [i:], [e], [ei] をただ羅列するだけでは理論的にも実践的にも無意味である。といっても、原則と例外の間の境界線を引くことは容易ではない。基準として考えられるものは、i) 歴史、ii) 現代英語における頻度、あるいはこれと関連して native speaker の直観、なども考えられるかもしれない。

(中略)

……規則の数を減らせば、全体としての規則の体系は簡潔なものになるが、膨大な「例外」が残されて、結局、そのような規則の教育面での効力は撲殺されざるを得ない。だが逆に規則の数を増やせば、例外は減る代りに、規則そのものは煩雑さを増し、生徒の受ける混乱した印象は減らない。従って、本編では規則の数をラディカルに減らすことは避けたが、(1) にあるような例³を羅列することはなかった。「綴りと発音の間の関係」は、次の三種に大別した。

i) 原則

ii) 例外として言及するもの。(N.B. として「原則」のあとに書き添えた。)

iii) 言及しない例外。(重要でない例外は、あえて言及しなかった。)

いずれにしても、「綴り」の教育の核心が、「綴りと発音の間には一定の原則が存在すること」、「この原則を身に着けることによって、英語の綴りの読み方の基本を習得することができること」を生徒に把握させることにすることは、いくら強調しても強調しすぎることはないと思う。(73-74)

(註引用者)

この論文では「原則」と「例外」の分類が教育的視点から行われており、かつ、「原則」に関しては非常に多くの単語が例として列挙されている。英語教師を目指している者であれば、一読に値する論文だろう。しかし、この論文を、同様に英語発音の「原則」と「例外」を示しているウィークのものと比較すると、両者の「原則」の扱いに差がみられる。例えば、引用箇所にも含まれている *ea* という二重母音字に関して、成田らは以下のように記述している。

(27) ea

[i:] または [e] と発音されるのが原則である。

1) [i:] と発音される場合。

beach, bead, beak . . . zeal

2) [e] と発音される場合。

bread, breakfast, dead . . . weather

N.B. 1. *break, great, steak* は *ea* を [ei] と発音する例外である。同様な例に *Yeats* [-ei-], *Reagan* [-ei-] がある。

N.B. 2. *real* [ri:əl, ri:əl], *idea* [aidi(:)ə], *theater* [θi(:)ətə] などの *ea* は二重母音ではなく、*e* と *a* は別の音節に属している。(97-98)

これに対して、ウィークは同じ二重母音字 *ea* に関して以下のように記述している。

ea(except *ear*)

Normal pronunciation: [i:], as in 'sea, tea, each. . . beaver', etc. Many more instances may easily be adduced by consulting a rhyming dictionary.

Divergent pronunciation: [e], [ei].

1. [e] in the following words, about 60 in all:

bread, dead, dread . . . weapon.

2. [ei] in 'great, break, steak . . . Yeats.

Note. *ea* is not a digraph in 'create [kri(:)ei't], creation, ide'a . . . Korea'.

Note also 'ordeal' [ɔ:di:'l, ɔ:di:'əl] and unstressed *ea* in 'area' [e'əriə]. (49)

成田らの定義する「原則」とウィークの定義する“Normal Pronunciation”を、そして「例外」と“Divergent Pronunciation”を、それぞれ同義語として扱うと、彼らの認識の間に差がみられる。成田らは二重母音字 *ea* の「原則」的発音を [i:], [e] として、[ei] を「例外」として扱っているのに対して、ウィークは「原則」的発音を [i:] として、[e], [ei] を「例外」として扱っている。この差は、[e] と発音される語が約 60 語で、押韻辞書を引けばより多くの例があげられるとされている [i:] に比べて少ないことが「例外」として扱われている原因として考えられる。また、これら両論文の各母音字・子音字・二重字等の発音における「原則」の定義を比較すると、成田らの「原則」の定義のほうが、より広範囲にわたっていることが判明する。これは、成田らの英語教育的視点に起因するものだろう。G4 の単語の難易度基準に基づくと、ウィークが列挙している 60 語のうち、36 語は高校卒業までに学習する基礎的な単語 (*bread, feather, pleasure, measure* 等) である。それらを「例外」として扱おうと英語学習者の混乱を増す恐れがあると判断し、成田らは「原則」の領域を広げたのだろう。

しかし、両者の定義の間に差があることは強調すべき点ではない。上述のように、成田らが日本の英語教育的視点に基づいて「原則」と「例外」の分類を行ったのに対して、ウィークはこの特徴を、英語教育的視点に基づかないで、より体系的に「原則」と「例外」を分類し考察している。この事情を考慮すれば両者の定義に差が出てくるのは、むしろ当然と言えるのではないだろうか。

では、この差をどのように考えていけばいいのか。率直に言うと、この差は G4 の [発音注意] 単語を分類するうえで重要ではない。なぜなら [発音注意] 単語内には、両者どちらの定義に基づいても、「原則」と「例外」が混在しているからである。英語教育的視点から分類を試みている成田らの定義する「原則」の中にさえ、[発音注意] 単語が含まれているのだ。この事実も、[発音注意] 単語には、英語発音の「原則」には従っているが、日本人英語学習者にとって発音が難解な単語も多く含まれているということを示唆している。その主な原因は、多くの日本人が英単語をローマ字読みしてしまう傾向にあることや、日本語に借用された英単語をカタカナ読みしてしまう傾向にあることが原因として考えられる。

以上より、日本人英語学習者にとって発音の難しい単語を分類する試みは不十分だと言えよう。そこで、本論では成田らの定義する英語発音の「原則」に則っているか否かという基準に基づきつつ、日本人英語学習者にとって発音が難しいとされる G4 の [発音注意] 単語を分類する。成田らの「原則」に依拠

する理由は、上述のように、成田らが英語教育的視点からこの論文を書いていることにある。その際、語源のかつ通時的な観点から、どういった理由で、綴り字と発音の不一致が生じるに至ったかについて示すことで、学習者の知的好奇心が刺激され、正しい綴り字と発音との関係性を身につけることが期待される。したがって、綴り字と発音の不一致という特徴と語源との関連を第2章で論じている。

下図の最上段は、G4におけるA・Bランク語約4250語を表し、二段目は、最上段の単語を、「原則」的発音をされる単語、「例外」的発音をされる単語に分けている。三段目は、二段目に属する単語を3つの枠に分けている。3つの枠は、(1)「原則」的発音をされる〔発音注意〕標記のない単語、(2)「原則」的発音をされる〔発音注意〕標記のある単語、(3)「例外」的発音をされる〔発音注意〕標記のある単語である（「例外」的発音をされる単語には全て〔発音注意〕標記が付されている）。今回の分類対象となる単語は三段目の〔発音注意〕標記ありとされている(2)と(3)二つの枠に含まれる251語である。

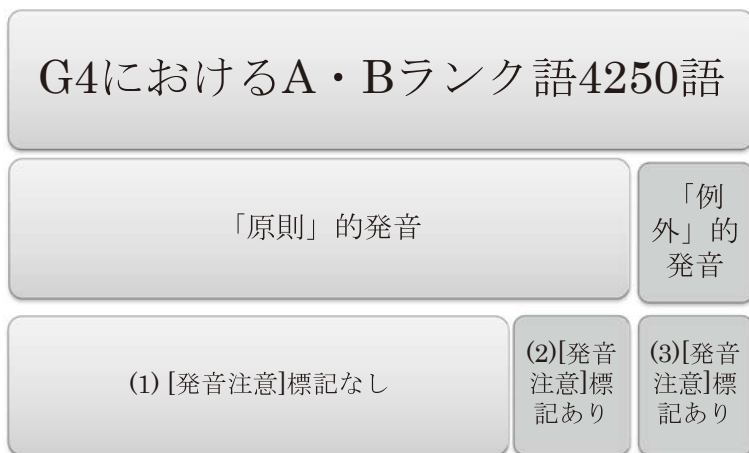


Figure 1

2. 語源との関連

2.1. ブリテン島史・英語史と語源との関連性

なぜ現代英語の特徴、綴り字と発音の不一致を考えるにあたって、英語語彙の語源に注目する必要があるのか。それは、この特徴がブリテン島史・英語史と密接に関連しているからである。ブリテン島史の簡略化は避けたいところではあるが、本論の目的はあくまでも綴り字と発音の不一致という特徴を持つ単語についての分類であるため、先行研究を参照しつつ、簡略な図を用いてブリテン島史、また英語史を概観する。

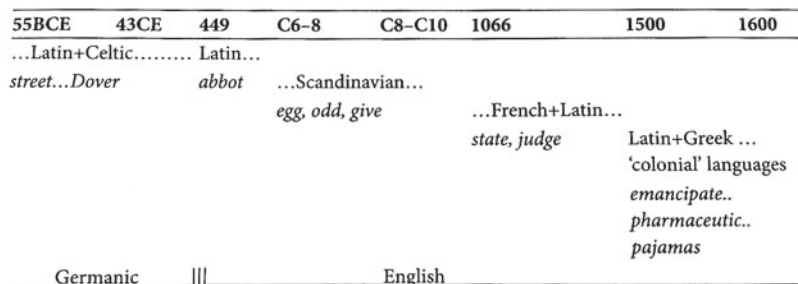


Figure 2 (Gelderen 2006: 9)

この図における略語“BCE”は *Before the Common Era* (西暦以前)、“CE”は *The Common Era* (西暦)、“C6-8”における“C”は *Century* (世紀) をそれぞれ表している。この図からも推測されるように、ブリテン島に英語という言葉が存在する以前は、ブリテン島への侵略者ローマ人と、ローマ化されたケルト系民族ブリトン人が定住していた。そして4世紀末からゲルマン民族の大移動がおり、449年、ゲルマン系のアングル族・サクソン族・ジユート族がブリテン島に侵略し、現代英語の源流となっている古英語 (Old English=OE, 450-1100) が形成され始める。その後、6世紀から8世紀にかけて北歐人が襲来し、古英語に北歐語が流入する。そして1066年、英語史上非常に重大な事件、「ノルマン人の征服」(the Norman Conquest) が起こり、大量のフランス語が流入し始める。フランス語の流入は語彙のみならず英語正字法、発音にも影響を与え、古英語とは一線を画す英語が形成される。これを中英語 (Middle English=ME, 1100-1500) という。16世紀初頭には大陸よりも少し遅れてルネッ

サンス期が到来し、ラテン語やギリシア語由来の単語、特に文化や芸術、学問の面での単語が非常に多く取り入れられた。なお、1500年までに、主要な文法変化が起こり、大母音推移（Great Vowel Shift）が起こり始めたため、その変化以降の英語は近代英語（Modern English=ModE, 1500-1900）と呼ばれる。なお、英語史の時代区分は、学者によって意見が分かれることもあるが、一般的に広く認められている唐澤（2011）が示す時代区分に従った。

ではこのブリテン島史・英語史と現代英語における「綴り字と発音との不一致」という特徴にはどういった関連があるのだろうか。筆者はそこに疑問を持ち、G4における[発音注意]単語の語源を調査した。なお、分類の基準となる語源の調査には寺澤の『英語語源辞典』（1997）を用いた。その理由として、*Oxford English Dictionary*, 2nd ed.（以下 *OED* と略す）よりも語源記述に関する記述が簡略かつ明快であったことがあげられる。また、この辞典は、*OED* の情報を基に編纂されているので、二つの辞書の間に用語以外、大きな差は見られなかったため本辞典を用いることに問題はないと判断した。また、英語本来語以外の借用語（borrowings）に関しては、直近の借用先を以て語源とした。結果は以下の図で示されている。

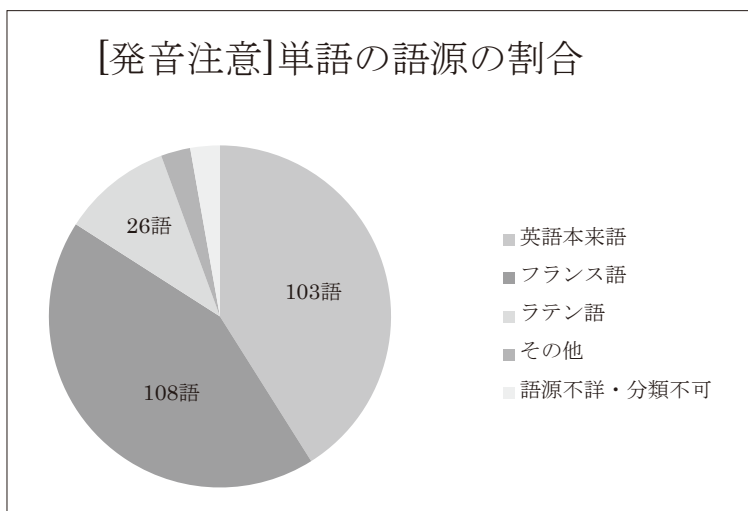


Figure 3

具体的な数値は英語本来語 103 語 (41%)、フランス語 108 語 (43%)、ラテン語 26 語 (10%)、その他 7 語 (3%)、語源不詳・分類不可 7 語 (3%) となる⁴。この調査から、[発音注意] 単語における英語本来語の割合は半分にも満たず、フランス語とラテン語の割合が半分以上を占めることが判明した。筆者の調査前の予想に反して、英語本来語の割合が高く結果が出たが、その原因としては、高校卒業までに学習する [発音注意] 単語内の割合であるため、基礎的な単語が多いことが推測される。

この調査から、現代英語の [発音注意] 単語は主に英語本来語、フランス語からの借用語、ラテン語からの借用語の三種に大別できると言えよう。広義には、ゲルマン語系の単語とロマンス語系の単語の二種に大別できるとも言える。なお、分類の用語としては、今後の中高の英語教育での資料としての有効性を考慮して、出来るだけ理解しやすい分類用語を採用した。各分類用語に関して補足すると、今回の分類対象である 251 語において、英語本来語 103 語の語源標記は全て OE とされている。一方、フランス語 108 語は OF (Old French), AF (Anglo-French), MF (Middle French), F (French) から、ラテン語 26 語は L (Latin), LL (Late Latin), NL (Neo-Latin) から構成されている。

このように、語源に基づいて [発音注意] 単語を分類すると、その語彙は、大きく三つの語源的カテゴリーに分類できることが判明した。これは何を意味するのか。この点は正字法や綴り字改革に大きく関連しているため、2・3 節において詳述する。

2.2. 英語正字法と語源

そもそも正字法とは何か。石橋らの『現代英語学辞典』(1973) では以下のよう

orthography [ɔ:θɔ:grəfi] 《正字法》(言)

ある時代における語の正しい書き方、または一言語の標準となる綴り字法の体系、またそれを研究する文法の一部門をいう。今日では「…お」と書かずに「…を」と書くのが社会的規範として認められた書き方であり、knight と綴るのが今では「正しい」とされているのであって nite とか knite などとは綴らない。(617)

これより英語正字法とは、「ある特定の時代の英語社会における、社会的規範として認められた綴り字法の体系」である。ポーとケイブルは前掲書において、英語正字法に関して史的概観をしつつ、その問題点について述べている。

156. *The Problem of Orthography.* Spelling is for most people a pedestrian subject, but for the English, as for the French and the Italians, in the sixteenth century the question of orthography or “right writing,” as Mulcaster preferred to call it, was a matter of real importance and the subject of much discussion. The trouble was not merely that English spelling was bad, for it is still bad today, but that there was no generally accepted system that everyone could conform to. In short, it was neither phonetic nor fixed. Speaking generally, the spelling of the modern languages in the Middle Ages had attempted with fair success to represent the pronunciation of words, and this is true of English in spite of the fact that Norman scribes introduced considerable confusion when they tried to write a language that they imperfectly knew and carried over habits that they had formed in writing French. The confusion was increased when certain spellings gradually became conventional while the pronunciation slowly changed (see, for example, § 177). In some cases a further discrepancy between sound and symbol arose when letters were inserted in words where they were not pronounced (like *b* in *debt* or *doubt*) because the corresponding words in Latin was so spelled (*debitum, dubitare*), or in other cases (for example, the *gh* in *delight, tight*) by analogy with words similarly pronounced (*light, night*) where the *gh* had formerly represented an actual sound. The variability of English spelling was an important part of the instability that people felt characterized the English language in the sixteenth century, especially as compared with a language like Latin. To many it seemed that English spelling was chaotic. (208)

(下線引用者)

以上より、本論のテーマでもある「綴り字と発音の不一致」という現代英語の特徴は、主に以下の三つの要因に引き起こされたといえよう。

- (1) ノルマン征服以降、ノルマン人写字生がフランス語的な綴り字法を英語

を書く時に用いたこと。これによって従来の英語的綴り字法とフランス語的綴り字法が共存することとなる。

(2) 特定の綴り字が規範として根付くも、発音はその後も次第に変化していったこと。特定の綴り字が規範となったきっかけは、ウィリアム・キャクストン (William Caxton) による活版印刷術の導入、さらには後に続く英語辞書の編纂である⁵。また、最大の発音変化は、ポーとケイブルが詳述しているように (238-239)、大母音推移 (The Great Vowel Shift) による母音の発音変化のことを指す。大母音推移に関しては3章2節で詳述している。

(3) 対応するラテン語等の語源を意識して発音されない文字が挿入されたこと (学術的な綴り字 = pedantic spelling)。学術的な綴り字に関しては、3章3節で詳述している。

このように三つある主な原因のうち、二つはフランス語とラテン語に関係しているため、「綴り字と発音の不一致」という特徴を考えるにあたって、語源を意識することは避けては通れない。よって、次章で単語を分類していく際、語源に関する記述もしている。

2.3. 綴り字改革 (spelling reform) と語源

以上で見たように主に三つの原因、うち二つは語源に関する原因によって、「綴り字と発音の不一致」という特徴が英語に定着していった。序章でも述べたように、この特徴は英語母語話者にとっても悩みの種となる特徴であったのは容易に想像できる。そこで、発音に従って綴り字を書き下ろし、英語発音をより表音的なものにしようとする「綴り字改革」に関する数多くの試みがイギリス・アメリカ両国でなされてきた。その成果は全く実らなかったとは言えないが、根本的な改革には今もなお至っていない。ポーとケイブルはその原因を以下のように指摘している。

231. *Spelling Reform*. . . . An influential opinion was expressed by Henry Bradley in his paper "On the Relation of Spoken and Written Language" (1919). He held that it was a mistake to think that the sole function of writing was to represent sounds. For many people nowadays the written word is as important as the spoken word, and as we read, many words convey their meaning directly without the intermediate process of pronunciation, even

mental pronunciation. To change the symbol that long practice enables us instantaneously to translate into an idea would be a handicap to many people, even though a temporary one. Besides, there are the numerous words that are distinguished in writing, though pronounced alike. For these and other reasons Bradley was opposed to any radical change in English spelling. The history of spelling reform makes it clear that in opposing radical change he was expressing the attitude of the majority of people. It is probably safe to say that if our spelling is ever to be reformed, it must be reformed gradually and with as little disruption to the existing system as is consistent with the attainment of a reasonable end. (335-36)

(下線引用者)

このように、綴り字改革の成果が見られない主な原因は、第一に「綴り字と発音の不一致」が英語話者にとってもはや当然のものとなり、一種の習慣として根付いていることがあげられる。第二に、仮に綴り字改革が行われた場合、同音異義語を表す語を区別することが困難になる恐れがあるということもあげられる。後者に関する例を一つあげると、仮に綴り字改革を行ってしまうと *night* と *knight* という二つの単語の区別を文脈に頼ることなしにはできなくなってしまい、返って煩雑さが増す可能性があるということだ。

このような事情を考慮して、またこの引用の終わりで述べられているように、根本的かつ急激な綴り字改革が今後行われる可能性は極めて低いことは明らかだ。よって、「綴り字と発音の不一致」が急激に改善されることはないと考えるのが現実的と考えるべきである。だからこそ、英語教育者はこの現代英語の特徴を理解し、英語学習者にそれを適切に伝え、彼らの発音学習を手助けしていく責務がある。次章では、[発音注意] 単語の分類を英語学と英語教育の観点に基づきながら行う。

3. 教育的視点に基づく [発音注意] 単語の分類

3.1. [発音注意] 単語の分類基準

2章では [発音注意] 単語について、語源的かつ通時的考察を行ってきた。3章では、必要に応じてその考察に言及しながら、[発音注意] 単語 251 語の

分類を行っている。序論でも述べたように、以下で作成されている分類枠は、どのような点で発音が難解なのかという基準に基づいて作成されている。通時的観点や音声学的観点を過剰に取り入れて、厳密な分類基準を設けると分類が細分化されすぎてしまい、専門性が高くなってしまうため、中高生を対象とした英語発音教育に効果的とは言い難い。そこで、英語発音教育を念頭に置き、できるだけ簡略で多くの単語を含む分類枠を作成している。そのため、分類不可となった単語も存在する。そういった単語については〔補足〕として個別的に簡略な説明をしている。

〔発音注意〕単語のうち、母音字の発音に関するものは2節で、子音字の発音に関するものは3節で、派生・屈折・品詞転換による発音変化に関するものは4節で、日本語として定着している単語の影響に関するものは5節で取り扱っている。

どのような点で発音が難解なのか、という基準に基づいて分類を行った結果、2つないしは3つの分類枠に属する単語が少なからず存在している。例えば、*limb* という単語については3節で詳述するが、語末の黙字 *b* に関して〔発音注意〕とされていると考えられるため、母音字 *i* については母音の発音に関する分類枠では取り扱っていない。しかし、語形の似ている *climb* という単語については事情が異なっている。*G4* の編者は *limb* と同様、*climb* も語末の黙字の *b* があるという点で〔発音注意〕単語としてしていると思われるが、筆者の塾講師としての経験上、*/climb/ といった間違えた発音をする学習者も少なくない。そのため *climb* という単語は、子音字に関する分類枠（3節）においてだけでなく、母音字の発音に関する分類枠（2節）でも取り扱われている。他にも筆者の経験から、*tomb* や *foreign* などの単語も2、3節の両枠において分類されている。その結果、単語の分類に関する客観性が欠けるという批判があるかもしれないが、学習塾という実際の教育現場での事情を考慮に入れることで、以下行われる分類がより現状に即したものになると判断し、以上のような単語をそれぞれ該当する分類に含めている。

このように複数の分類枠に含まれる単語が数多く存在するため、1節から5節の分類における単語の合計は251語を超えている。はじめに、〔発音注意〕単語251語を以下にアルファベット順で示す。

[発音注意] 単語：

advise, alcohol, alien, allow, ancient, anxiety, anxious, Asia, Australia, beard, behave, blood, bomb, bow (「弓」の意), bow (「お辞儀をする」の意), boy, break, breakfast, breathe, broad, burial, business, busy, calm, capacity, cease, ceiling, certain, chamber, channel, climate, climb, collar, color, colonel, comb, compass, condemn, conscience, cost, cough, country, county, courage, court, cousin, cow, creature, crow, damn, danger, dangerous, dawn, deaf, debt, decent, decision, delicate, diamond, disease, dog, doubt, drown, dumb, earth, energy, enough, evil, executive, excuse⁽ⁿ⁾, exhaust, exhibit, exhibition, exist, false, fault, ear, feather, finger, first, flood, flour, folk, food, foot, foreign, front, garage, ghost, glove, gross, guard, heart, height, hole, hotel, housing, hurt, idea, image, immediate, iron, island, jealous, journey, knee, knowledge, label, lamb, language, laugh, law, lead, learned^(adj), leisure, limb, liquid, live^(adj), lively, London, loose, lose, lost, machine, manager, meant, measure, mechanism, minute⁽ⁿ⁾, modern, moment, monkey, month, mortgage, mouths, muscle, mustn't, naked, news, northern, occasion, ocean, only, operator, orange, ought, oven, owner, pair, palm, parade, parliament, patient, pattern, pear, pearl, people, percentage, persuade, pleasant, pleasure, possess, post (「郵便」の意), post (「地位」の意), pour, prayer, preface, pretty, previous, private, prove, psychology, purchase, question, recollect, risen, road, robot, rocket, rough, route, said, salesman, Satan, scene, scheme, scissors, screw, secretary, seize, shoulder, singer, smooth, sofa, soldier, son, soup, sour, southern, spread, stadium, stomach, subtle, surface, sweat, sword, taught, tear (「涙」の意), tear (「引き裂く」の意), theme, thorough, threat, through, toe, tomb, tongue, tool, touch, tough, tour, treasure, treat, trouser, tunnel, typical, use⁽ⁿ⁾, used to, vague, variety, vehicle, virus, waist, wander, war, warm, warn, warning, waste, weapon, wear, weigh, weight, wind (「曲がる」の意), wolf, women, wonder, wood, wool, worry, wound, yacht (以上 251 語)

以上の [発音注意] 単語において、同音異義語・同綴異義語については括弧の中に日本語の語義を示している。また、品詞によって発音異なる単語については [発音注意] 表記が付されている品詞を示すために、名詞であれば (n)

と示した。他に、(adj), (adv), (v) などという標記が付されている単語があるが、それぞれ adjective (形容詞)、adverb (副詞)、verb (動詞) の省略である。この表記方法は後続の節においても同様である。

下線で示されている部分が G4 において [発音注意] とされている要因と考えられる。上述のように下線が複数引かれている単語については、該当する節においてそれぞれ取り扱われている。また、斜字体の使用は、視覚的にわかりやすい表記を用いたことによる。例えば、*taught* のように、*au* という母音字の発音と *gh* という子音字の発音に関して取り扱う際、*au* と *gh* が隣接しているため、両者を下線で示し、さらに一方を斜字体で示した。

3.2. 母音字の発音—「原則」的発音と大母音推移

実際に分類を示していくうえで成田らの母音字の発音の「原則」をもとに分類枠を作成しているため、以下に成田らの「原則」の定義を示す。

(8) 単独母音字の発音

母音字 a, e, i, o, u には、それぞれ、「短母音」(short vowel) と「アルファベット音」(alphabetic sound) という、二つの「原則的」な発音がある。

	短母音	アルファベット音
a	[æ]	[ei]
e	[e]	[i:]
i(y)	[i]	[ai]
o	[ɑ ɔ]	[ou əu]
u	[ʌ]	[ju:]

Figure 4 (成田ら 1983: 76)

(24) 二重母音字の発音の原則

二重母音字は、次のように発音されるのが原則である。

ai	} [ei]	{ fail
(ay)		{ <u>day</u>
au	} [ɔ:]	{ <u>author</u>
(aw)		{ <u>draw</u>
ea	{ [i:]	eat
	{ [e]	<u>head</u>
ee	[i:]	feet
ei	} { [ei]	{ <u>eight</u> (gh については (65) 参照)
		{ <u>they</u>
(ey)	} { [i:]	{ <u>receive</u>
		{ <u>key</u>
eu	} [ju:]	<u>feud</u>
(ew)		<u>few</u>
ie	[i:]	<u>field</u>
oa	[ou əu]	<u>oak</u>
oi	} [ɔi]	{ <u>boil</u>
(oy)		{ <u>boy</u>
oo	{ [u:]	<u>cool</u>
	{ [u]	<u>book</u>
ou	} [au]	{ <u>out</u>
(ow)		{ <u>cow</u>

Figure 5 (成田ら 1983: 96)

(36) 「単独母音字+r」の発音の原則

「アクセントのある単独母音字+r」が語末か、他の子音字の前にあるときは、それぞれ次のように発音されるのが原則である。

ar	[ɑɹ]	car [kɑ́ɹ]	start [stɑ́ɹt]
er	}	her [hɑ́:ɹ]	serve [sɑ́:ɹv]
		ir	bird [bɑ́:ɹd]
ur	} [ɔ:ɹ]	fir [fɑ́:ɹ]	hurt [hɑ́:ɹt]
		or	born [bɔ́ɹn]
or	[ɔɹ]	abhor [əbhɑ́ɹ]	

Figure 6 (成田ら 1983: 103)

(42) 語末の「アクセントのある単独母音字+re」の発音

「アクセントのある単独母音字+re」が語末にある場合は、次のように発音される。

are [ɛər] care, dare / ere [iər] here, mere / ire [aiər] fire, wire /
ore [ɔər] more, store / ure [juər] cure, pure

Figure 7 (成田ら 1983: 105)

(49) 「二重母音字+r」の発音の原則

「二重母音字+r」は、それぞれ次のように発音されるのが原則である。

air	[ɛər]	<u>pair</u>	
ear	{	[iər]	<u>hear</u>
		[ɛər]	<u>wear</u>
		[ə:r]	<u>learn</u>
eer	[iər]	<u>deer</u>	
eir	[ɛər]	<u>their</u>	
oar	[ɔər]	<u>board</u>	
oor	{	[uər]	<u>poor</u>
		[ɔər]	<u>door</u>
our	{	[auər]	<u>hour</u>
		[ɔər]	<u>four</u>
ower	[auər]	<u>power</u>	

Figure 8 (成田ら 1983: 107-108)

以上が成田らの示す母音字に関する「原則」的発音である。以上5つの図表に関して説明を加えると、Figure 4の単独母音字については短母音とアルファベット音が「原則」と定義されている。Figure 5においては二重母音字の「原則」が、Figure 6, 8においてはそれぞれ、子音字 *r* が単独母音字と二重母音字に付されたものに関する「原則」が定義されている。また、Figure 7においては *re* が付された単独母音字に関する「原則」が定義されている。なお、子音字 *r* に関しては学者によって母音として扱うか子音として扱うか差が出るが、ここでは成田らが母音字の枠の中で分類を行っていることから、その立場に従

うことにする。ここで特筆されるべき点は、これら「原則」的発音がされる際は、必ず母音字の属する音節に強勢があるということだ。2節2項において詳述するが、強勢のない音節に属する母音字の発音には、以上の発音の「原則」は適用されない。また、1章における成田らの引用部分にもあるように、英語発音における「原則」と「例外」の境界線を定めるのは非常に困難である。そこで成田らは、歴史的事情や現代英語における頻度を考慮して、「原則」を定義している。その結果、一つの綴り字に対して、2・3の「原則」的発音が見受けられる場合も多く、綴り字と発音が一対一の対応となっていない母音字がほとんどである。

序論における引用でポーとケイブルが述べているように、理論的には、綴り字と発音の一対一の対応さえ存在すれば、「原則」や「例外」などといった概念が生じることはないはずだ。古英語期においては完璧とまではいかないが、綴り字と発音の対応性は今と比べると非常に規則的だったことが判明している。その規則的な対応が崩れる主な要因として、2章で言及した「ノルマン人の征服」によるフランス語的綴り字法と英語綴り字法の共存、大母音推移、術学的な綴り字があげられるが、このうち最も母音字の発音に影響を及ぼしたものは、その名称からも推測されるように大母音推移である。一見最も単純と思われる単独母音字に「原則」的発音が二種類（短母音・アルファベット音⁶）存在しているという事実は、大母音推移によって引き起こされた。そこで、アルファベット音が生まれる要因である、英語史上の重大な発音変化、大母音推移に言及する必要がある。アップワドとディヴィドソン（Upward and Davidson）は、大母音推移について、発音の変化例を具体的に示しながら以下のように述べている。

The Long Vowels of Middle English and the Great Vowel Shift

There were seven long vowels in Middle English, spelt as below:

- /a:/ as in *name*, *faas* 'face';
- /ɛ:/ as in *clene* 'clean', *heeth*, *death*;
- /e:/ as in *nede* 'need', *sweete*;
- /i:/ as in *fine*, *shyne*, *wiis*;
- /ɔ:/ as in *holy*, *oon* 'one';
- /o:/ as in *mone* 'moon', *foot*;

/u:/ as in *hous*, *clowde* 'cloud'.

Notice that the long vowel could be indicated either by a doubling of the vowel-letter or by a following -E. . . . Notice also that spelling is not in itself a reliable guide to the pronunciation of some of the vowels.

The Great Vowel Shift (GVS) is the name given to a number of important and related pronunciation changes which affected these long vowels during 15th, 16th and perhaps early 17th centuries and which resulted both in the differences between the sound-spelling correspondences of the continental European languages and those of Modern English remarked on above (e.g. French *dame* /dam/, English *dame*; French *lime* /lim/, English *lime*) and differences in pronunciation of the stressed vowels of pairs of words such as *divine/divinity* and *serene/serenity*, and also ultimately, though not directly, in (i) Modern English words such as *meet* and *meat* being alike in sound, and (ii) the difference in pronunciation of the OO of *food*, *good* and *blood*, etc.

Neither the exact mechanics nor the exact dates of these changes need concern us here. The GVS and subsequent developments affected the pronunciation of the Middle English vowels as follows:

Middle English /a:/ > /ɛ:/ in the GVS, then > /e:/ and subsequently /eɪ/:
Modern English *mate*, *name*;

Middle English /ɛ:/ > /e:/ in the GVS, then subsequently > /i:/: Modern
English *beat*, *tea*;

Middle English /e:/ > /i:/ in the GVS: Modern English *beet*, *see*;

Middle English /i:/ > /eɪ/ in the GVS, and subsequently /aɪ/: Modern
English *bite*, *time*;

Middle English /ɔ:/ > /o:/ in the GVS, then > /oo/ and subsequently /əʊ/:
Modern English *road*, *bone*;

Middle English /o:/ > /u:/ in the GVS: Modern English *boot*, *moon*;

Middle English /u:/ > /oo/ in the GVS, and subsequently > /aʊ/: Modern
English *house*, *out*.

(中略)

Since English spelling was during this same period becoming ever more fixed, these sound-changes were for the most part not reflected in the spelling system. (176-177)

(網かけ・下線引用者)

この記述からもわかるように、大母音推移とは、中英語期における強勢のある音節に属する長母音が、調音位置（舌）の上昇に伴い、発音が変化することを指す。なお、以上の引用において、大母音推移によって引き起こされた発音変化は網かけがなされている部分のみであり、その後の変化に関しては主に18世紀の産物である。下線部で示されているように、大母音推移が起こる以前の長母音の指標は、二重母音字（doubling of the vowel-letter）、もしくは語末の *e*（a following -E）であり、それら母音字の発音は非常に表音的だった。しかし、以上の例が示しているように、大母音推移による発音変化によってその表音性が揺らぎ始めたのである。また、長母音の指標の一つであった語末の *e* は、中英語期にはあいまい母音 /ə/ として発音されていたが次第に無声化し、黙字となった。しかし、成田らが述べているように、黙字となった語末の *e* は現代英語においても、アルファベット音を表す指標として重大な役割を持っていることは強調されるべき点である。

3. 2. 1. 強勢のある母音字の発音に関する [発音注意] 単語

強勢のある母音字の発音には成田らの定義する「原則」的発音と「例外」的発音が混在している。そこで、まず「原則」的発音をされる強勢のある母音字に関する [発音注意] 単語と「例外」的発音をされる強勢のある母音字に関する [発音注意] 単語の二つに分けて分類を行っている。これら2つの分類枠に含まれる単語は合計178語である。

3. 2. 1. 1. 「原則」的発音をされる母音字を含む単語

この分類枠に分類される単語には、非常に基礎的な単語で、[発音注意] 標記が付されていないものが多く存在する。実際、筆者が塾で中学生に対して英語を教えていると、特に二重母音に関して正しく発音できていない学習者は多い。そこで、まず [発音注意] 単語に含まれていない基礎的な単語に関して、語末の *e* の役割を説明し、母音字の二重母音化が起こっていることを学習者に伝える必要があるだろう。例えば、*name*, *home* など G4 の A ランクに区分さ

れている単語においても、必ず母音字 a, o がそれぞれ二重母音 /ei/, /ou/ として発音されているということを教育者は強調すべきである。そうでなければ、*/ne:m/, */ho:m/ のような日本人に典型的な読み間違いをしてしまう恐れがある。そのうえで、以下の分類枠内の〔発音注意〕単語を学習者に示すことが効果的である。

a. 長母音・二重母音として発音される強勢のある母音字

長母音：

breathe, cease, ceiling, court, creature, dawn, decent, disease, earth, evil, exhaust, fault, first, food, hurt, idea, immediate, law, lead, leisure, pearl, pour, previous, screw, seize, taught, theme, tool, treat, vehicle (以上 30 語)

二重母音：

alien, ancient, anxiety, allow, Asia, Australia, beard, behave, bow, boy, chamber, climate, climb, comb, county, cow, danger, dangerous, drown, folk, ghost, gross, ear, hole, live, lively, moment, occasion, ocean, only, pair, parade, patient, pear, persuade, post, post, road, robot, salesman, Satan, sofa, soldier, sour, stadium, tear, tear, toe, vague, variety, virus, waist, waste, wind, wear, weigh, weight (以上 57 語)

(計 87 語)

b. 短母音として発音される強勢のある母音字

anxious, breakfast, collar, deaf, decision, feather, foot, jealous, meant, meaure, pleasant, pleasure, risen, rocket, secretary, spread, sweat, threat, treasure, tunnel, typical, weapon, wood, wool (以上 24 語)

以上が、下線部で示されている強勢のある母音字が「原則」的発音をされるにも関わらず〔発音注意〕とされている 111 語である。これらの単語が〔発音注意〕とされる要因は主に、一つの(二重)母音字に対して「原則」的発音が複数あるもの、日本人がローマ字読みをする結果誤った発音をしてしまうもの、日本語となっている単語の影響を受けるもの、派生・屈折・品詞転換による発音変化に関するものなどがあげられる。

まず、「原則」的発音が複数ある（二重）母音字に関しては、「a. 長母音・二重母音として発音される強勢のある母音字」と「b. 短母音として発音される強勢のある母音字」を対比すると多く見られる。例えば、*ea* という母音字は a. の分類における *breathe*, *cease*, *creature*, *disease*, *lead*, *treat* の 6 語では、/i:/ という長母音で発音されるが、b. の分類における *breakfast*, *deaf*, *feather*, *jealous*, *meant*, *measure*, *pleasant*, *pleasure*, *spread*, *sweat*, *threat*, *treasure*, *weapon* の 13 語では、/e/ という短母音で発音されている。他の母音字 *i*, *e*, *o*, *oo* 等に関しても *ea* と同様に、二重母音・長母音か短母音で発音される場合がある。「二重母音字 + r」である *air*, *ear*, *our* は a. の分類においてのみ見られるものだが、これらに関しては「原則」的発音が複数ある（ただし *air* は一つ）ことに加えて、/r/ という音素が二重母音字の「原則」的発音に影響を与えていることから「発音注意」とされている。つまり、二重母音字の「原則」的発音に /r/ を加えて発音すると誤った発音になる場合が多いということだ。

日本人がローマ字読みをする結果、誤った発音をしてしまうものとして、特に *ou(ow)* と *au(aw)* という母音字があげられるだろう。*allow*, *bow*, *county* などの *ou(ow)* の部分を /ou/ と、*dawn*, *fault* などの *au* の部分を /au/ と発音する誤りは多く見受けられる。このような単語に関しては、それぞれの「原則」的発音を強調して示す必要がある。

日本語となっている単語の影響を受けるもの、派生・屈折・品詞転換による発音変化に関するものに関しては、それぞれ 4・5 節で取り扱う。

3. 2. 1. 2. 「例外」的発音をされる母音字を含む単語

上の「原則」的発音がされる単語とは対照的に、強勢のある母音字の発音が「例外」的発音をされる「発音注意」単語については以下の分類枠に分類されている。ここでの「例外」的とは、上で示されている成田らの定義する「原則」に該当しない発音全てを指す。

blood, bow, break, broad, burial, business, busy, color, compass, cost, cough,
country, courage, cousin, crow, dog, enough, false, flood, front, garage,
glove, guard, heart, height, journey, knowledge, laugh, London, lose, lost,
machine, monkey, month, operator, ought, oven, owner, people, prayer,
pretty, prove, rough, route, said, shoulder, son, soup, southern, stomach,
thorough, tomb, tongue, touch, tough, tour, wander, war, warm, warn,
warning, wolf, women, wonder, worry, wound, yacht (以上 67 語)

「例外」的という言葉からも推測されるように、ここに含まれる単語の下線で示されている母音字の発音は、「原則」的発音に比べて非常に頻度が低いものであり、一般的な傾向を見出すのは困難である。もちろん、個別に通時的な語形・発音変化に関する考察を行えば、どのような過程で現代英語における発音へと変化したかを理解することができるが、それは学習者の負担過多になるだろう。そこで、67 語中、44 語を占める母音字 *o* と、*o* を含む二重母音字 *oo*, *ou* に関する一部 (27 語) の発音を取り扱う。

a. /ʌ/ と発音される母音字 *o*, *oo*, *ou*

まず、母音字 *o*, *oo*, *ou* が /ʌ/ と発音されているという点で [発音注意] 単語とされているものを取り扱う。それぞれ、「原則」に従えば /ʌ/ と発音される母音字ではないが、以下 21 語の下線部は /ʌ/ と発音されている。

二重母音字 *oo*, *ou* を含む単語：

blood, country, cousin, enough, flood, rough, southern, touch, tough

単独母音字 *o* を含む単語：

color, compass, front, glove, London, monkey, month, oven, son, stomach,
tongue, wonder

上段の *oo*, *ou* という母音字を含む単語 9 語に関しては、通時的な音韻変化の結果だが、そういった現象を取り扱うことは、学習者にとって負担過多となる恐れがあるため、強調すべき点ではないだろう。二段目の 12 語に関連しては、唐澤 (2011) の以下の説明を引用する。

some は中英語では sum と綴られ、幹母音は /u/ であった。中英語期になると、フランスの写生字（文字を書く職業の人）の習慣に従い、m, n, v, w などと u が隣接する際には、文字の識別が容易になるように u を o と綴るようになった。above, come, love, son など、現在 /ʌ/ と発音する o はたいていもともと u だったもので、綴りは o に変更されたものの、発音のほうは cut, cup などの u と同様の発達を遂げたものである。(245)

このような、英語学の知識がなくとも理解しやすいと思われるものは教育者が提示すべきだろう。それによって、学習者が正しい発音を身につけることが期待される。

b. /u:/ と発音される母音字 *o, ou*

lose, prove, route, soup, tomb, wound

以上 6 語の下線部は、/u:/ と発音される。route, soup に関しては、日本語として「ルート」、「スープ」と定着しているため、母音字に関しては問題なく発音できる学習者も多いだろうが、他の 4 語については、誤った発音をする学習者が多い。

通時的な音韻変化を取り扱うことは学習者の負担過多になるという事情を考慮して、a. の分類に分類されなかった単語や、b. の分類で言及されていない 4 語については、本論では取り扱わない。いずれにしても、このような「例外」的単語については、教育者自ら適切な発音を強調して示すことによって正しい発音を学ばせることが求められる。

3. 2. 2. 強勢のない母音字の発音 - 弱化作用

ここまで、強勢の有無に関して強調してきたが、その理由は、第一強勢のない母音字の発音は、「原則」的発音をされないからである。言い換えると、強勢のない母音字に関する原則が存在するのだ。その点に関して、ポーとケイブルは以下のように述べている。

178. Weakening of Unaccented Vowels. A little observation and reflection shows us that in unaccented syllables, too, the spelling does not accurately represent the pronunciation today. This is because in all periods

of the language the vowels of unstressed syllables have had a tendency to weaken and then often to disappear. This is true of all parts of the world. For example, we do not distinguish in ordinary or rapid speech between the vowels at the beginning of *ago*, *upon*, *opinion*. The sound in all three words is [ə]; in other cases it is commonly [ə] or [ɪ]. Consider the unstressed middle or final syllable in the words *introduce*, *elegant* [ə, ɪ], *drama*, *color*, *kingdom*, *breakfast* (brɛkfəst or brɛkfst), *Monday* [i]. (240)

(下線引用者)

強勢のない音節に属する母音字の弱化 (weakening) という「普遍的」な作用によって、その母音字はいまい母音 /ə/、もしくは /ɪ/ として発音される傾向がある。そして、引用文中の *breakfast* の発音 /brɛkfst/ が示しているように、時には母音が弱化するだけでなく発音から消失することさえもあるのだ。日本語においても、母語話者である我々は気が付かない場合が多いかもしれないが、母音の弱化は日常会話においてよく見受けられる。以下にあげられている単語は、母音字部分の発音に強勢がないことによって、その母音が弱化しているため、[発音注意] とされている。

alien, ancient, Asia, Australia, breakfast, capacity, certain, channel, climate, conscience, courage, cousin, dangerous, decent, delicate, diamond, energy, evil, foreign, image, immediate, jealous, knowledge, label, language, London, manager, mechanism, minute, modern, moment, mortgage, northern, occasion, ocean, orange, parade, parliament, patient, pattern, percentage, persuade, preface, previous, private, purchase, Satan, sofa, southern, surface, tunnel, weapon (以上 52 語)

以上 52 語の中でも、弱化の傾向が著しく、まい母音でさえ発音から消失する可能性のあるものについては、その単語自体斜字体で表されている。なお、消失可能性の有無の判断は G4 の発音記号を基準とした。上述のように、強勢のない母音の弱化は普遍的な傾向であるため、多音節語においてはほぼ必ず見受けられる現象であることから、特に日本人にとって、弱化に関して注意が必要な単語が示されている。そのため、5 節「日本語として定着している単語の影響に関する [発音注意] 単語」にも含まれているものが増えている。

それでもなお、弱化作用の働いている単語をこのように独立した項で取り扱うのは、学習者が弱化という概念を理解することによって、日本語として定着している単語の英単語を発音する際、意識的に弱化作用を働かせるようにするという狙いがあるからだ。これによって、日本語の音韻体系を、英単語を発音する際に応用して、ローマ字読みのような発音になることは避けられるだろう。

以下の5語は下線部で示された第一強勢のない母音に弱化作用が働いていない特異な例である。そのため、これら単語の発音指導に当たるときは稀な例外として注意を促す必要があるだろう。

hotel /houtél/, operator /ɑːpəreitər/, recollect /recələct/, robot /róubɑ:t/,
thorough /θəːrou/

3.3. 子音字の発音

2節では、母音字に関して、どのような点で発音が難解なのかという基準に基づいて分類を行った。3節でも子音字に対して同様の考察を行っている。その際、通時的かつ音声学的観点に基づく分類枠を作成している。なお、子音字に関する〔発音注意〕単語は以下に示されているように合計54語みられる。下線部は〔発音注意〕標記が付されている原因として考えられる部分である。

advice, alcohol, bomb, calm, climb, colonel, comb, condemn, damn, de**bt, doubt, dumb, excuse⁽ⁿ⁾, exhaust, exhibit, exhibition, exist, finger, folk, foreign, ghost, height, housing, iron, island, knee, knowledge, lamb, limb, mortgage, mouths, muscle, mustn't, news, ought, palm, psychology, scene, scheme, scissors, singer, smooth, subtle, sword, taught, thorough, through, tomb, use⁽ⁿ⁾, used to, vehicle, weigh, weight, yacht (以上54語)**

これらのうち43語は子音字の黙字について〔発音注意〕標記が付されている。従って、まず子音字の黙字について考察を行っている。

3.3.1. 子音字の黙字に関する〔発音注意〕単語

G4における〔発音注意〕単語のうち、子音の黙字を含む単語は以下の43語があげられる。下線部の引かれている子音字は発音をされない黙字である。

bomb, calm, climb, colonel, comb, condemn, damn, debt, doubt, dumb, exhaust, exhibit, exhibition, folk, foreign, ghost, height, iron, island, knee, knowledge, lamb, mortgage, muscle, mustn't, limb, ought, palm, psychology, scene, scissors, singer, subtle, sword, taught, thorough, through, tomb, used to, vehicle, weigh, weight, yacht (以上 43 語)

ウィークは前掲書において黙字が英単語中に存在している原因を以下のように説明している。

B. THE SILENT CONSONANT LETTERS

Due to a variety of causes there are a fair number of single words and groups of words in English in which consonant letters are silent. Most of these consonants have been lost through assimilation to neighbouring sounds, while others have been dropped in combinations that were awkward to pronounce. Sometimes these consonants are found in loanwords in which they were never pronounced in English, for example g in 'campaign, reign, sign', s in 'chassis, corps, viscount' or t in 'ballet, depot, hautboy', etc. There are further certain words in which consonants were inserted through etymological influence, sometimes false, from Latin or Greek, though they never came to be pronounced in English, thus for example b in 'debt, doubt, subtle', c in 'indict, victuals', s in 'aisle, isle, island', etc. (114)

(下線引用者)

以上より、英単語中に黙字が存在する原因は主に三つ存在する。その原因に基づいて、子音字の黙字を含む単語を分類する。

3. 3. 1. 1. 同化作用が働く子音字の組み合わせ

第一の原因は、隣り合う子音字の発音の調音位置 (place of articulation) や調音方法 (manner of articulation) が近似しているゆえに働く同化作用 (assimilation) である。ウィルキンソン (Wilkinson) によると同化作用は「労力の節約 (economy of effort)」の一種で、以下のように記述されている。

... But in many cases consonants have been dropped from the pronunciation owing to “economy of effort”, in other words because it is easier not to pronounce them! In this way the *k* has fallen out of *knee*, *knight*, the *l* out of *talk*, *folk*, the *w* out of *write*, *wrong*, *two*, *sword*, *who*, the *b* out of *lamb*, *climb*, the [g] out of *sing*, *young*, the *t* out of *castle*, *listen*, *Christmas*, *often* and the *d* out of *Wednesday*. (44)

(網かけ・下線引用者)

同化作用は、[発音注意] 単語においては *bomb*, *climb*, *comb*, *condemn*, *damn*, *dumb*, *lamb*, *limb*, *mortgage*, *mustn't*, *singer*, *tomb*, *used* to の 13 語の下線部に働いている。*-mb* という子音字を含む 6 語を例にとると、*m* と *b* という子音字は音声上、調音位置が同じ (/m/、/b/ いずれも両唇音) で、調音方法が異なる (/m/ は鼻音であるのに対して、/b/ は破裂音)。ここで重要なことは、隣り合う子音字の音声の調音位置か調音方法のいずれかが同一であることが同化作用の起こる原因であるということだ。他の子音字の音声の組み合わせ (/m/ と /n/、/ŋ/ と /g/、/t/ と /g/、/s/ と /t/、/d/ と /t/) も調音位置か調音方法のいずれかが同一であるため、同化作用が起こっているのだ。

このような音声学的な説明は合理的であり、学習者は一度この同化作用についての概念を身につければ、後に出会うことになるだろう複合語 (*cupboard*, *raspberry* 等) における発音の同化作用も難なく理解できることが期待される。

3. 3. 1. 2. ぎこちない発音になってしまう子音字の組み合わせ

第二の原因として、ウィークは発音するときこちない (*awkward*) 発音になってしまう子音字の組み合わせについても論及している。ウィルキンソンによると、これも「労力の節約」の一種である。上でみた同化作用と決定的に異なる点は、隣り合う子音字の音声が近似しているという特徴は見受けられず、隣り合う子音字との組み合わせが乖離している、もしくは子音字を発音すると、文字通りぎこちない発音になってしまうという特徴があげられる。

上の引用において網かけで示されている部分がこの分類枠に該当すると考えられるが、*calm*, *folk*, *height*, *knee*, *knowledge*, *ought*, *palm*, *psychology*, *sword*, *taught*, *thorough*, *through*, *weigh*, *weight* の 14 語がこれに含まれると言えよう。これら単語の下線で示された子音字を発音すると、現代英語の音韻体系にそぐわない不自然な発音になってしまう。ぎこちない発音、という文言からも推測

されるように、合理的というよりも英語母語話者の感覚に基づくといってもよいだろう。英語には母語話者の感覚に基づいて容認されない文字の組み合わせが存在し、その結果ある子音字が発音から脱落することがあるのだ。

しかし、これら子音字の多くは、かつて発音されていたという点は学習者の知的好奇心を刺激するためにも言及されるべきである。例えば、上記 14 語中、*gh* という子音字が含まれる単語 7 語は全て英語本来語であるが、アップワードとデイヴィドソンによると、これら 7 語に含まれる *gh* は古英語期において、*h* と綴られており、奥舌母音の後ろでは /x/（無声軟口蓋摩擦音）、前舌母音の前では /ç/（無声硬口蓋摩擦音）と発音されていた。しかし、中英語期に入りフランス語的綴り字法の導入によって *h* が *gh* と改変され、次第に黙字へと変化したのである。これほど詳細に通時的な説明を学習者にする必要性はないだろうが、*gh* という子音字は、かつて発音されていたという簡略な説明は行われるべきだろう。それによって、一言語における音韻体系は時代が経つとともに変化するということが理解されることが期待される。

3. 3. 1. 3. 術学的な綴り字

第三の原因は、2 章 2 節「英語正字法と語源」でみた、術学的な綴り字に他ならない。これに含まれる単語は、*debt*, *doubt*, *foreign*, *island*, *scissors*, *subtle* である。『英語語源辞典』によると、これら 6 語中、*island* 以外の 5 語は古フランス語期 (OF, 800-1550) に借用された単語であり、英語に借用された時の語形はそれぞれ *det(t)e / deatte*, *doute(n) / dute(n)*, *forein*, *cisours / cysowres*, *sutil / so(u)til* である。また、*island* は英語本来語であり、古英語期の語形は *igland* である。近代英語期において、これら 6 語に、ラテン語の対応する単語に含まれていた子音字 (*b*, *c*, *g*, *s*) が挿入されたにも関わらず、発音は変化しなかった。

以上 3 分類のうち、前二者は「労力の節約」に関わるものであるが、「ぎこちない発音になってしまう子音字の組み合わせ」における *gh* の例が示しているように、単語を個別に調査するとかつては発音されていた子音字が、ある時代から黙字となったものがほとんどである。以下の図表はシュミットとマーズデン (Schmitt and Marsden) によるもので、現代英語において黙字である子音字、それらの例、またその原因を示している。こういった情報を、必要に応じて学習者に示していくことも彼らの知的好奇心に刺激を与えるという点で有

ORIGIN OF SILENT LETTERS IN ENGLISH SPELLING		
Silent letter	Examples	Reason
k before n	<i>knight, knee</i>	k ceased to be pronounced during 17 th century
g before n	<i>gnat, gnaw</i>	g ceased to be pronounced during 16 th century
m before n	<i>mnemonic</i>	Greek spelling; m never pronounced in English
p before n	<i>pneumonia</i>	Greek spelling; p never pronounced in English
p before s	<i>psyche, psychology</i>	Greek spelling; p pronounced by learned people probably until 18 th century
w before r	<i>wrist, wrong</i>	w probably no longer pronounced after mid-16 th century
w after s	<i>sword</i>	w no longer pronounced after mid-17 th century
l after a and before f or v	<i>calf, half</i>	l probably not pronounced after Middle English period
l after a and before k	<i>talk, chalk</i>	l probably not pronounced after Middle English period
l after a and before m	<i>calm, palm</i>	l probably not pronounced after Middle English period
l in modal verbs	<i>should, could</i>	l ceased to be pronounced soon after the Middle English period in <i>should</i> ; never pronounced in <i>could</i> (added to spelling by analogy with <i>should</i>)
g after a vowel and before m or n	<i>sign, paradigm</i>	g reflects French/Latin original spellings but was probably never pronounced in English
word-final b after m	<i>bomb, thumb</i>	b in some words never pronounced (<i>crumb</i>), in others it ceased to be pronounced quite early (<i>thumb</i>), in still others in Early Modern period (<i>dumb</i>)
word-final n after m	<i>autumn, column</i>	n reflects original French spelling but never pronounced in English
t after s or f and before -en	<i>listen, soften</i>	t ceased to be pronounced in Early Modern period
word-initial h	<i>honest, hour</i>	The loanwords are French, where h not pronounced; English usually follows this, but sometimes not (e.g., <i>host</i>)

Figure 9 (Schmitt and Marsden 2006)

効だろう。だが、過度にこのような情報を提供することは、学習者にとって負担過多につながる。教育者は状況に応じて情報量を調節していく必要がある。

以上において、43 語中 33 語を分類した。なお、子音字の黙字に関する残り 10 語は以上の三種に分類することができないので、[補足] として取り扱っている。このように、全てではないが、子音字の黙字を含む単語の約 8 割は三つの大きい分類枠の中で考えることができるのである。この分類によって、子音字の黙字が存在する原因や背景知識を、効果的に英語学習者に示すことができる。学習者の知的好奇心を刺激し、長期記憶として根付くだろう。その結果、正しい発音が身につくことが期待される。

3. 3. 1. 4. [補足] 分類不可能な子音字の黙字

以下に示されている単語は類推によって子音字が挿入されたもの、異なる綴り字法を持つ他言語の母語話者が、その綴り字法を英語にも応用して綴ったものなど多岐に渡る。そのように一つの原因にまとめることができないものに関しては一つの分類枠を設けるのではなく、『英語語源辞典』の記述を基に、個別に原因を示す。もちろん、そのような単語のために新たな分類枠を作成することも可能だが、そうした場合、分類があまりに細分化してしまうことと、英語史や英語学を専門として学んでいない英語学習者にとって、語形変化や音韻変化を取り扱うことは負担過多になる可能性が高いという事情を考慮した結果、以下のような形で取り扱うことにした。

[補足]:

colonel: イタリア語からフランス語に借用された時に *colonnello* から *coron(n)el* という語形になり (異化 =dissimilation)、それが英語に借用された。しかし、16 世紀後半以降イタリアの兵法書を英訳したときにこの形が定着する。その結果、英語においても 19 世紀初頭まで /l/ が発音されていたが、古風な発音に戻る。

exhaust, exhibit, exhibition, vehicle: ラテン語やフランス語起源の単語である。h はこのように語中だけでなく語頭においても黙字になることが多い。例) *hour, honest*

ghost: フラマン人印刷業者がフラマン語の綴り字法を用いて、英語本来語の *gost* に *h* を挿入したが、発音は変化しなかった。

iron: /i:rən/ > /airən/ > /aiə(ə)n/ > /aiə(r)n/ という発音変化を経た。

muscle: 借用元のフランス語において *muscle* と綴られている。

scene: 借用元のフランス語において *scène* と綴られている。

yacht: オランダ語の綴り字 (*jacht*) を導入した。発音はオランダ語でも英語と同一である。

また、黙字ではないが、子音字に関して発音注意とされている語として分類できなかったものが以下の 11 語である。

advise, alcohol, excuse⁽ⁿ⁾, exist, finger, housing, mouths, news, scheme, smooth, use⁽ⁿ⁾

これらのうち *advise, excuse, use* は 4 節で、*alcohol, news, smooth* は 5 節で取り扱われているため説明を省略する。*exist, housing, mouths* に関しては下線の子音字を無声音として発音する誤りがよくみられることが、*scheme* に関しては *sch* という子音字の組み合わせに対応する音素として /sk/ と /ʃ/ の 2 つあげられることが [発音注意] とされる原因だろう。*finger* に関しては、*g* という子音字に関して [発音注意] であると考えられる。*finger/fiŋgə(r)/* における /g/ は、綴りが似ている *singer/siŋə(r)/* などの類推から、誤った発音 */fiŋə(r)/ が想定されるのではないだろうか。

3.4. 派生・屈折・品詞転換による発音変化に関する [発音注意] 単語

ここまで、母音字と子音字の発音に関する [発音注意] 単語を 2・3 節で考察してきた。4 節においては、母音字・子音字については分類の基準とせず、新たな分類枠を作成している。ここでは、派生・屈折・品詞転換に関する [発音注意] 単語、以下 33 語を取り扱っている。

advise, anxiety, anxious, behave, bow, bow, break, breakfast, breathe, conscience, creature, decision, excuse⁽ⁿ⁾, housing, knowledge, learned, live, lively, meant, mouths, naked, pleasant, pleasure, prayer, risen, said, secretary, southern, tear, tear, typical, use⁽ⁿ⁾, wind (以上 33 語)

以上に含まれる単語はすべて、派生・屈折・品詞転換によって、[発音注意]とされているものである。派生・屈折・品詞転換についてより簡略な説明をすると、語形が、発音の異なる単語と同一、もしくは近似しているという特徴を持った単語がこの分類枠に分類されている。語形が別の単語に同一であるか近似していると、学習者は別の単語の発音の影響を受けた誤った発音をする場合がみられる。そこで、以下のような「ペア」的単語との発音の差異を学習者に示す必要がある。

advise(-advice), anxiety-anxious, behave(-have), bow-bow, break-breakfast, breathe(-breath), conscience(-science), creature(-create), decision(-decide), excuse⁽ⁿ⁾ (-excuse^(v)), housing(-house), knowledge(-know), learned^(adj) (-learned^(v)), live^(adj) / lively^(adv) (-live^(v)), meant(-mean), mouths(-mouth), naked(*), pleasant/pleasure(-please), prayer(-player), risen(-rise), said(-say), secretary(-secret), southern(-south), tear-tear, typical(-type), use⁽ⁿ⁾ (-use^(v)), wind(-wind) (以上 33 語)

以上のリストの「-」は、「発音の影響を受ける、もしくは互いに影響を与え合う」ということを表す。また、括弧内に示されている単語は、G4において [発音注意] 単語ではないということを表している。behave(-have) を例にとると、*behave* という単語は /bihev/ ではなく、誤って */bihæv/ と発音されることが多いが、これは *have*/hæv/ の影響を受ける傾向にある。なお、*have* は [発音

注意] 単語ではない。以上のことを表している。このような単語に関して、過剰に通時的・音声学的説明をしてしまうと生徒の負担過多となることは明らかである。そのため、このような単語を取り扱う際は、「-」で結ばれている語と対比し、発音の違いを強調することが求められる。

naked(*) という表記は、想定される対応する語 **nake* は現代英語には存在しないことによるものである。また、/k/ という無声子音の後に続く *ed* はたいてい /kt/ と発音されるため、語尾の *ed* という文字を含む単語 (*kicked, liked* 等) からの類推で */neikt/ と誤った発音がみられることが [発音注意] とされる原因として考えられる。prayer(player) という表記については、日本人が /l/ と /r/ という音素を区別しない傾向があることで、*player* の発音 /pleiər/ や */preiər/ のように発音される場合があることによる。もちろんこの「ペア」は派生、屈折、品詞転換のどれにもあたらないが、多くの日本人にとっては差の感じられない「ペア」的単語であると判断し、この分類枠に含めた。

3.5. 日本語として定着している単語の影響に関する [発音注意] 単語

この分類においては、日本語として定着している単語の影響に関する以下の [発音注意] 単語 65 語を扱っている。

alcohol, Asia, Australia, boy, channel, comb, compass, cost, danger, dangerous, delicate, diamond, dog, energy, front, garage, ghost, glove, hole, hotel, idea, image, iron, label, language, leisure, liquid, London, machine, manager, minute, modern, moment, monkey, news, ocean, operator, orange, oven, owner, parade, pattern, percentage, post, post, private, question, road, robot, rocket, salesman, Satan, shoulder, smooth, sofa, soldier, sour, stadium, theme, toe, tunnel, variety, virus, waist, wool (以上 65 語)

以上の単語がカタカナ表記され、日本語の音韻体系に従って発音される場合の発音と、英単語として発音される場合の発音との間に差異がみられる。もちろん、日本語と英語という異なる言語間において、音声的な差異がみられるのは当然のことだが、ここでは筆者の塾講師としての経験を基に、特に日本人が誤って発音する傾向にある単語を厳選している。

2 節と 3 節の分類枠に含まれている単語数を比べると分かるように、[発音

注意] 単語は母音に関するものの方が圧倒的に多い。その傾向は5節でも変わらず、外来語として日本語に定着している単語においても、ほとんどが母音に関するものである。そこで、2節で行われている分類と同様に、はじめに母音字の発音に関して日本人英語学習者が注意すべき単語を示している。

a. 母音字の発音に関する単語

Asia, Australia, boy, channel, comb, compass, cost, danger, dangerous, delicate, diamond, dog, energy, front, garage, ghost, glove, hole, idea, image, label, language, leisure, liquid, London, machine, manager, minute, modern, moment, monkey, ocean, operator, orange, oven, owner, parade, pattern, percentage, post, post, private, question, road, robot, rocket, salesman, Satan, shoulder, sofa, soldier, sour, stadium, theme, toe, tunnel, variety, virus, waist, wool (以上 60 語)

以上 60 語において、強勢のある母音字の発音については下線で、弱化作用が働いている母音字については斜字体で示している。強勢のある母音字と弱化作用の働いている母音字のいずれも、日本語のカタカナ読みに影響を受けた発音がされることが、これら単語に「発音注意」標記が付されている要因の一つであると推測される。「アジア」、「オーストラリア」といったように下線の二重母音を短母音として発音し、語末の「ア」を弱化させることができないのは日本語の音韻体系の影響によるということ間違いなさだろう。そのため、英語における母音字が短母音・二重母音・長母音のうち、どの発音がなされるのかという点と、弱化作用に関する母音字の発音を強調して示す必要がある。

b. 子音字の発音に関する単語

子音字の発音に関する単語は以下の 10 語である。

alcohol, energy, minute, news, salesman, smooth, theme, virus, waist, wool
(以上 10 語)

これら英単語に対応するカタカナ表記は「アルコール」、「エネルギー」、「ミニッツ」、「ニュース」、「セールスマン」、「スムーズ」、「テーマ」、「ウイルス」、「ウ

エスト」、「ウル」である。英単語の下線で示されている子音字に注目すると、これらのカタカナ表記が英語の音素から甚だしく逸脱しているのは明らかである。よって子音字の発音に関しては、日本語として定着しているカタカナ表記との差異を、母音字以上に強調する必要があるだろう。

結論

現代英語の欠点とも称される綴り字と発音の不一致という特徴は、世界中の英語学習者を苦悩させ続けてきた。この特徴を受けて、綴り字に基づいて英語発音を体系的に分類する研究がなされてきたが、日本人英語学習者にとってそのような分類が有効なのかという問には疑問の余地が残される。なぜならば、そういった分類は「日本人英語学習者にとって」という視点に特化したものではないからである。そこで本論ではその視点に特化するため、『ジーニアス英和辞典』第4版における〔発音注意〕標記の付された単語を、「どのような点において発音が難解なのか」という基準に依拠して分類を行った。

その分類を行う前に、2章で綴り字と発音の不一致という特徴を包括的に理解するために重要であるブリテン島史・英語史の概観を行った。その過程で、〔発音注意〕単語の語源、英語正字法の歴史、綴り字改革について考察した。この考察の結果、〔発音注意〕単語におけるロマンス系言語の割合が半数を超えていることが判明したが、この事実は英語綴り字法が主にフランス語とラテン語の綴り字法の影響を受けたことを示唆している。このような外的要因によって中英語期、綴り字と発音の不一致という特徴がみられ始めるようになった。一方、最大の内的要因である大母音推移による母音の発音変化は、この特徴をさらに顕著なものにしたという点で重要である。このように、通時的な観点から現代英語における綴り字と発音との不一致という特徴が、どのような経緯を経て広がったのかを理解することは、教育者が学習者に対して合理的な説明をする際、必要不可欠である。

3章において実際に分類が示されているが、2節で母音字に関する〔発音注意〕単語、3節で子音字に関する〔発音注意〕単語、4節で派生・屈折・品詞転換による発音変化に関する〔発音注意〕単語、5節で日本語として定着している単語の影響に関する〔発音注意〕単語が取り扱われている。その際、適宜2章で行った通時的・語源的考察を学習者に提示することで、知的好奇心を刺激し、現代英語における綴り字と発音の関係性を正しく理解し、正しい英語発音を身

に着けることが期待される。しかし、あまりに専門性の高い説明は教育的事情を考慮した結果行われていない。

また、「どのような点で発音が難解なのか」という基準を定めるうえで、[発音注意]とされる要素が複数あると判断された結果、一つの単語が複数の分類枠に分類される場合が非常に多く見受けられた。その結果、一[発音注意]単語に関して複数の視点から説明を加えることによって、学習者が正しい発音を身につけることが期待される半面、焦点が一点に定まらないため、正しい発音を身につけられない恐れもある。しかし、[発音注意]単語を複数の視点から考察することは、学習者の英語発音全般に対する包括的な理解に寄与するだろうと判断し、多くの単語について複数の面から考察を行った。このような総合的な知識を持ち合わせた教育者のもと英語発音教育が行われれば、学習者は英語史的・音声学的根拠のもと、正しい発音を身に着けることができ、さらには現代英語における綴り字と発音との不一致という問題をより包括的に理解することができるだろう。

なお、今回の分類では3章で示されている分類枠に分類することができずに、[補足]として扱う単語が存在した。このような単語に関する綴り字と発音の関係性は、通時的な音韻変化によってしか説明できないものが多い。そのような専門性の高い説明は英語発音教育に効果的でないと判断し、また分類の細分化を防ぐために、今回は分類の対象から除外した。英語発音教育に効果的で、そのような単語をも含む新たな分類枠を作成することを今後の課題としたい。

Notes

- ¹ 『ジーニアス英和辞典』の初版からの総発行部数は800万部で、『新英和中辞典』の1200万部に劣る。しかし前者の方がより中高生に馴染みがあり、かつ中高生の使用する電子辞書にも搭載されているため、本論で使用した。
- ² ここでいう「原則」とは、成田らが同書において定義する原則である。母音字の発音に関して、短母音になる場合 (*a* であれば [æ]) とアルファベット音になる場合 (*a* であれば [ei]) を母音字の前後の条件に基づいて分類がなされている。子音字の発音についても同様に、前後の条件に基づいて分類がなされている。母音字に関して48、子音字に関して15の計63の原則が定義されている。
- ³ 成田らは「(1) 不規則な英語の綴り」で、[i:] という音は、以下の11の異

なった綴りによって書き表されると述べている。e (he, eve), ea (eat), ee (bee), ei (receive), ey (key), i (machine), ie (field), ae (Caesarian), eo (people), oe (amoeba), ay (quay)

- ⁴ *G4*において、[発音注意] 標記が付されたもののうち、その他に含まれるものは *loose* (古北欧語)、*manager*, *rocket* (イタリア語)、*robot* (チェコ語)、*sofa* (フランス語・イタリア語・スペイン語・ポルトガル語のいずれか)、*trouser* (アイルランド語)、*yacht* (オランダ語) の7語である(カッコ内は借用元言語を表す)。また、語源不詳・分類不可7語のうち、語源不詳に含まれるものは5語 (*boy*, *dawn*, *dog*, *monkey*, *pour*)、分類不可に含まれるものは *mustn't* と *used to* である。このように二語で一見出し語となっているものは、一語ずつ語源を調べることも可能だ。しかし、これらを構成する四語を個々に *G4* で参照すると、四者とも [発音注意] 単語には含まれない。よって、これら二つの見出し語は調査の整合性に支障をきたすと考えたため、今回の調査では分類不可とする。また、これらは「語」ではなく「句」だが、[発音注意] と標記が付されている251のうち、「句」は上の2句しかないので、本論では「句」を省略している。
- ⁵ William Caxton は大陸で活版印刷術の技術を学び、1476年ロンドンでその技術を普及させる。これが、綴り字の固定化の第一のきっかけであるが、のちに続く英語辞書の編纂によって固定化が進む。その中でもとりわけ綴り字の固定化に貢献したものは、Samuel Johnson の *A Dictionary of the English Language* (1755) である。
- ⁶ 成田らは、「アルファベット音」という用語を使う理由を、母音字の「長音」([ɑ:], [ɔ:], [i:], [ɔ:], [u:]) と、それぞれの母音字の「アルファベットの中での読み方」を区別するためである、と述べている。

Bibliography

- Baugh, Albert Croll and Thomas Cable. *A History of the English Language*. 5th ed. London: Routledge, 2002. Print.
- Gelderen, Elly van. *A History of the English Language*. Amsterdam: John Benjamins, 2006. Print.
- Schmitt, Norbert and Richard Marsden. *Why Is English Like That?: Historical Answers to Hard ELT Questions*. Ann Arbor: U of Michigan P, 2006. Print.

- Scragg, D. G. *A History of English Spelling*. Manchester: Manchester UP, 2011. Print.
- Upward, Christopher and George Davidson. *The History of English Spelling*. Chichester: Wiley-Blackwell, 2011. Print.
- Wijk, Axel. *Rules of Pronunciation for the English Language: An Account of the Relationship between English Spelling and Pronunciation*. London: Oxford UP, 1966. Print.
- Wilkinson, Hugh E. *The How and Why of English*. 2nd ed. Tokyo: Kenkyusha, 1978. Print.
- 堀田隆一. 『英語史で解きほぐす英語の誤解 納得して英語を学ぶために』東京, 中央大学出版部, 2011.
- 唐澤一友. 『英語のルーツ』東京, 春風社, 2011.
- 菊池清明監修:唐澤一友, 堀田隆一, 福田一貴, 貝塚泰幸, 松崎武志. 『英語学: 現代英語をより深く知るために—現代英語の諸相と英語学術語解説—』大阪, 浪漫書房, 2008.
- 菊池清明. 『英語史: 現代英語の特質を求めて—多文化性と国際性—』大阪, 関西人文科学出版会, 2009.
- 成田義光, 長谷川存古, 小谷晋一郎. 『発音・綴り・語形成』(講座・学校英文法の基礎 第一巻) 東京, 研究社出版, 1983.
- 辞書・辞典:
- The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Oxford UP, 1989. Web. 17 Dec. 2012.
- Urdang, Laurence. *Loanwords Dictionary. A Lexicon of more than 6,500 Words and Phrases Encountered in English Contexts that are not fully Assimilated into English and Retain a Measure of their Foreign Orthography, Pronunciation, or Flavor*. Michigan: Gale Research Company, 1988. Print.
- 石橋幸太郎, 勇康雄, 宇賀治正朋, 勝又永朗, 鳥居次好, 山川喜久男, 渡辺藤一. 『現代英語学辞典』東京, 成美堂, 1973.
- 小西友七, 南出康世. 『ジーニアス英和大辞典』第4版, 東京, 大修館書店, 2006.
- 松浪有, 池上嘉彦, 今井邦彦. 『大修館英語学辞典』東京, 大修館書店, 1983.
- 大谷武彦. 『日本語を使いさばくカタカナ語の事典』東京, あすろ出版, 2008.

大塚高信, 中島文雄. 『新英語学辞典』縮刷版, 東京, 研究社, 1987.
寺澤芳雄. 『英語語源辞典』東京, 研究社, 1997.

The Frequent Lack of Correlation between Spelling and Pronunciation in English:

The Classification of Difficult to Pronounce Words from the Educational Perspective

Abstract

It has been pointed out by many English linguists that there is a frequent lack of correlation between spelling and pronunciation in the English language. English learners all around the globe have a difficult time in remembering the spelling of words or pronouncing English words correctly. Japanese English learners are no exception. I teach English to junior high school students at a preparatory school and frequently hear students' incorrect pronunciation of English words. Although some studies have been done to examine spelling-pronunciation correspondence in the English language, there has not been enough research on words that are difficult to pronounce for Japanese learners of English. In this thesis, I take the approach that it is crucial for English teachers to have a general view of the history of the English language, so that they can understand the apparently chaotic relationship between spelling and pronunciation in Present Day English.

The structure of this paper is as follows: Chapter 1 is a review of previous research on the classification of words. In Chapter 2, there is an overview of the history of the British Isles and the English language in relation to those words that

are labeled [発音注意] in *Genius English-Japanese Dictionary*, 4th ed. In Chapter 3, there is a classification of difficult to pronounce words according to the following features. There are words that are difficult to pronounce because of (1) the vowel letters, (2) the consonant letters, (3) the similarities to other words in terms of word form, and (4) the influence of the pronunciation of Japanese words of foreign origin.

The aim of this thesis is then to make an educationally effective classification of difficult to pronounce words, so that we can help English learners acquire the ability to pronounce those words correctly and then help them understand the correspondence between spelling and pronunciation more comprehensively.